

顕浄土真実教行証文類序（五）

高田短期大学学長 栗原廣海

一、難信金剛の信樂

前回は、

ゆえに知んぬ、円融至徳の嘉号は、悪を転じて徳を成す正智、難信金剛の信樂は疑いを除き証を獲しむる真理なりと。（よつて、この上ない徳をまどかにそなえた名号は、悪を転じて徳に変えなす正しい智慧のはたらきであり、得難い金剛の信心は、疑いを除いてさとりを得させてくださる真理であると知ることができた）

の前半を考察し、「正智」である「南無阿弥陀仏」の名号が、悪（煩惱・罪障）を消滅させるのでは

態ではないのです。「信心」の本体は、「正智」である「南無阿弥陀仏」の名号そのもの、智慧と慈悲の「仏心」そのものなのです。

このように、「信心」は人間の心のはたらきを超えたはたらきであり、その体である仏の智慧は決して破壊されることなく、最も堅い宝石であるダイヤモンドのようであることを、「難信金剛の信樂」と言われたのです。

そして、「正智」によつて開かれる「信樂（信心）」によつて、是非・善悪相対の人間の分別の世界を超えて、さとりの真実の世界へと向かうことができないことが、示されているのです。

続いて聖人は次のように説かれます。

しかれば凡小修し易き真教、愚鈍往き易き捷徑なり。大聖一代の教、この徳海にしくなし。（このようなわけで、浄土の教

なく、悪を悪のままに徳（菩提・功德）に転じ変えなすはたらきをすることを確認しました。

では、後半の、「難信金剛の信樂は疑いを除き証を獲しむる真理なり」とはどういうことでしょか。「信樂」とは「信心」であり、信心は人間の心に開かれるものです。それは間違いありません。しかし、それは決して人間の分別の領域に属する事態ではありません。従つて、人間の努力によつて自ら開くことのできるものではありません。では、どのようにして開かれるのか。「正智」である「南無阿弥陀仏」の名号が、私たち凡夫の心にはたらくとき、換言すれば、私に阿弥陀仏の「まかせよ、かならず救う」との喚び声、すなわち「南無阿弥陀仏」が開こえてきたとき、そのときに開かれるものであると言うことができるでしょう。ですから、「信心」は、「疑」と相対するところの人間の心、つまり分別の領域に属する事

えは凡夫にも修めやすい真実の教えであり、愚かな者にも行きやすい近道なのである。釈尊が生涯に説かれた教えの中で、この浄土の教えに勝る教えはない）

三十五歳でさとりを開かれてから八十歳で入滅されるまでの四十余年の間、釈尊は一人ひとりの資質に応じて教えを説かれ、その教えの数の多さは「八万四千の法門」ということばで伝えられています。それほど多くの教えの中で、釈尊は韋提希夫人に対して、機縁が熟したとして、はじめて浄土の教えを説かれたのでした。

その教えは、五濁悪世の、自力の行などとてもかなわないすべての凡夫が、何の区別・差別もなく、平等に救われ、仏になれるもつともやさしい、勝れた教えだったので。『観無量寿経』が語る、王舎城の悲劇の主人公である韋提希夫人の念仏による救済は、五濁悪世の凡夫にその身の事実を明

らかに知らしめるとともに、そのような凡夫であるからこそ阿弥陀仏は智慧の名号のはたらきをもつてかならず救い、一人たりとももれることなくさとりに至らしめてくださることを例証していると言ふことができるでしょう。

あらゆる凡夫が、例外なく平等に救われ、仏になることができる、かけがえのない勝れた教えの徳を、聖人は果てしなく広く深い海にたとえて、「徳海」とおっしゃっているのです。

二、専らこの行に奉え唯この信を崇めよ

次のように続きます。

穢えを捨て浄じようを欣ねがい、行ぎように迷まどい信しんに惑まどい、心昏しんくらく識しり寡すくなく、悪重あくおもく障さわり多おほきもの、ことに如来にょらいの發遣はつけんを仰あおぎ、必かならず最勝さいしやうの直道じきじように帰きして、専もつぱらこの行ぎように奉つかえ、唯やこの信しんを崇あがめよ。(煩惱に穢れた世界を捨てて清らかなさとりの世界を願いながら、行に迷

い、信に惑い、心が昏く知るところが少なく、罪悪が重く障りが多い者は、とりわけ釈尊のお勧めを仰ぎ、必ずこの最も勝れたまことの道である本願に帰して、ひとえにこの行につかえ、ただこの信を崇めなさい)

仏法との出遇いを果たすことのできた人は、釈尊が若き日に何に苦悩され、苦悩の解決のためにどのような道を歩まれ、苦悩をどのように解決されたのかを学ぶことができます。それをおして、私たちの現実世界が煩惱に汚れた、厭うべき穢土であることを知り、煩惱の汚れない清らかなさとりの世界を求めるべきであることを知るのですが、いざさとりを求めて実践しようとしても、どこまでも無明むみやうの暗さから離れられない凡夫は眞実の行道を知ることができず、生死しやうじの苦海に久しく沈み続けて煩惱による罪障を蓄積し続けるしかないのが現実です。

そのような凡夫に対して、聖人は「如来の發遣を仰げ」とおっしゃいます。「發遣」とは、阿弥陀仏が浄土から招き喚よんでくださる「招喚しやうかん」に対して、娑婆世界の教主である釈尊の、阿弥陀仏の招きに応じて浄土を目指せとお勧めです。そして、この釈尊の勧めに従って、「必ず最勝の直道に帰せよ」とおっしゃいます。「最勝の直道」とは、智慧の名号が悪を転じて徳を成し、名号を体とする信心がさとりを獲させる最も勝れた眞実の道、すなわち本願念仏の道ということです。この道は紆余曲折のない、直ちにまっすぐにさとりに至る道ですから、「直道」と言われているのです。

続いて、「専らこの行に奉え、唯この信を崇めよ」とおっしゃいます。「この」は、「最勝の直道」を指していますから、「この行」とは本願の行、すなわち如来より賜った名号、「南無阿弥陀

仏」であり、「この信」とは、如来より賜った信心、すなわち、名号を体として凡夫に開かれた仏心です。もしもこの行と信が、凡夫が行ずる行であり、凡夫が信じる信であるならば、「行に奉える」とか、「信を崇める」という表現はあり得ないこととなります。如来より賜った名号、「南無阿弥陀仏」に奉えているのが称名の行であり、凡夫の心を開く「まかせよ、必ず救う」の「南無阿弥陀仏」を尊崇しているのが信心であるということができるといえます。

生死の苦海に久しく沈んでいる凡夫がたすかる道、それを聖人は「弥陀の悲願のふねのみぞのせてかならずわたしける」(『浄土高僧和讃』「龍樹菩薩」の第七首)とうたっておられます。奉え崇めるべき「行信」は、凡夫が唯一さとりに至ることのできる、弥陀の本願の船のはたらきそのものであったのです。